

# 『終わり良ければ全て良し』 論考

## *All's Well That Ends Well*

稲 富 健一郎

### 特徴

先ず、制作時期に関しては、パローレスがヘレナと処女性について議論し、処女を増やすためには処女を捨てなければならない、処女を守り通すことは賢明ではないというようなことを言っており、その上、喪に服している場面で始まっていることなどから、『終り良ければ全て良し』は、処女女王エリザベス存命中には書けないような危険な内容を含んでいるので、崩御の直後1604年頃に書かれたと考えられている<sup>1</sup>。

これは捉えどころのない分りにくい劇で、従って当然のことながら、劇場では人気が無かった。バートラムとヘレナの結婚で終わっているのに、一応喜劇と見なされているが、シェイクスピアのこれまでのロマンティック・コメディにみられるような楽しみが、この劇には殆ど見られない<sup>2</sup>。そして、全体に暗い。実際、「我が子を手放すのは、二人目の夫を葬るようなもの In delivering my son from me I bury a second husband.(1.1.1.)」という伯爵夫人の嘆きでこの劇は始まるし、老伯爵は既に死去しており、その息子のバートラムは、父の死を嘆きつつ、王に仕えるためにパリに向かって出発する。しかし、その王も年老いて重病に陥っている。更に、王を救えるかも知れない唯一人の医者であるヘレナの父も、既に亡くなっている。死へと傾斜している社会のこのような陰鬱さが、最初からこの劇を覆っている<sup>3</sup>。従って、その暗い雰囲気は喜劇と呼ぶにふさわしくない。さりとして、だれも殺害されないのが悲劇の定義にも当てはまらない。つまり、複雑さがこの劇の特徴である。ヘレナが人間業を越えた技量によって王の病気を治し、彼女が恋慕うバートラムを夫にし、終幕に再び彼を獲得し、永遠の愛の誓いを彼から引き出す。しかし、彼女はバートラムをいわば罠にかけて結婚させるのであり、バートラムの方からみれば、自分が愛しても尊敬してもいない女性と結婚させられる訳であり、甚だ迷惑な話である。それ故、ヘレナを、妻としてではなく、動物の足につけて自由に行動ができないようにする「おもり木 (clog)」(2.5.55) であるとして嫌っている。しぶしぶ結婚させられた後でも、ヘレナが「見知らぬ人同士と敵同士は別れる時にキスをしないもの Strangers and foes do sunder, and not kiss. (2.5.88.)」と言って、おそろおそろキスを求めても、彼はそれを拒否する。それは彼が彼女を「見知らぬ者」、或いは、「敵」と見なしていることを示している<sup>4</sup>。ヘレナは、王の命令により結婚することができて、捨てられた恋人の状態からは抜け出せるが、捨てられた妻という新しい困難に直面することになり、結局、絶望的な片思いの状態にいることには変わりはない。

この新しい事態は、登場人物のどちらかが変わらなければ解決出来ない。つまり、ヘレナがバートラムなしに生きて行くか、彼がヘレナを好きになるようになるかである。そこで彼女は、フランスを離れてスペインに巡礼に行き、自分は死んだという噂を広め、バートラムを忘れさせることによって、即ち、第一の方法に依って、事態を打開しようとする。しかし、偶然によって二人は再会し、彼が彼女に課していた一見不可能に見えることを彼女はやり遂げ、彼に公に自分の非を認めさせ、永遠の愛を宣言させるのであ

る。そこでこの劇は終わっている。しかし、『真夏の夜の夢』や『お気に召すまま』の終幕に感じられるような安堵感や満足感がここにはないのである。終幕でバートラムは再びヘレナの方策により、嘘つきで、女性の敵という公のレッテルを貼られて、ヘレナを妻として受け入れなければならない状況に追い込まれるのである。彼は社会的な恥を感じて態度を変えざるをえなかった。だから彼の永遠の愛の宣言は、本心から出たものであるかどうか、甚だ疑わしい。ここで彼の心からの愛の宣言が期待されるのであるが、彼は韻をふんだ唯一つの二行連句を王に向かって言い、条件をつけているだけである。

閣下、彼女がこのことをはっきりと私に納得させることができますれば、  
彼女を心からいつまでも愛するでしょう。  
If she, my liege, can make me know this clearly,  
I'll love her dearly, ever, ever dearly. 5.3.314-5.

バートラムのこのそっけない言葉の後、王が楽観的に未来を予見する。

ともあれ、万事皆く行ったようだ。終りがこのようにめでたく終れば、  
苦いことは過ぎ去って、甘いことが一層有難く嬉しく感じられる。  
All yet seems well; and if it end so meet,  
The bitter past, more welcome is the sweet. 5.3.331-2.

バートラムとヘレナとの結婚も、今後皆く行くのか、或は、皆く行かないのかははっきりしない<sup>5</sup>。非常に曖昧で複雑な劇である。特にヘレナの実像を捉えるのは至難の業である。

### ヘレナの複雑な性格

主人公バートラムと同様、女主人公ヘレナも共に意志が強く、独立心が旺盛でバートラムは兵士として、ヘレナは結婚において、運命を切り開き、自分自身の満足を得ようと心に決めている。そして彼らの仲が皆く行かないのは、一つには彼らが強すぎる個性を持っているからである。幕開きの場面で、二人とも両親との間にある絆から自由になろうとしている。バートラムの父はヘレナの父と同様に、最近亡くなっており、バートラムは母と家を後にして、宮廷に向かおうとしている。この若い二人のどちらも親の死を深く悲しんでいない。それどころかヘレナは自由になったとさえ感じている。

御父様のことを思っているのではない。  
あの方（バートラム）のために涙を流しているのです、御父様を思い出して  
泣いているのじゃないわ。御父様はどのような方だったか。  
もう忘れてしまった。私が思い出すのは、  
バートラム様のお顔だけ。  
I think not on my father,  
And these great tears grace his remembrance more  
Than those I shed for him. What was he like?  
I have forgot him: my imagination  
Carries no favour in't but Bertram's... 1.1.81-5.

少なくとも父の死によって、彼女は世間に出て、自由に自分の道を歩むことが出来るようになるのである

が、彼女自身と愛する男性との社会的な地位や階級が、あまりにも違いすぎるので、もともと彼女は困難な運命に支配されていることを悟る。バートラムは今や伯爵であり、彼女は召使同然であるからだ。前の台詞に続いて、社会的な地位があまりにも違い過ぎるので、結婚は諦めなければならないと、彼女は考える。

あの方を想うことは、  
ある輝く特別な星に恋をして、その星と結婚できるようにと  
願うようなもの。それほど高い所にいらっしゃる。  
あの方の輝く副次的な光で我慢しなければならないわ、  
あの方の天球に入れなくても。  
身の程を知らない恋は、自らを蝕む。  
ライオンに連れ添おうとする牝鹿は  
その恋のため命を落とす。

'Twere all one  
That I should love a bright particular star  
And think to wed it, he is so above me:  
In his bright radiance and collateral light  
Must I be comforted, not in his sphere...  
Th'ambition in my love thus plagues itself:  
The hind that would be mated by the lion  
Must die for love.

1.1.87-94.

ヘレナはここで、天文学もしくは占星術の用語を使って、二人の身分の違いを示している。違う天球に属している星は並行して動き、ある天球の星の光は他の天球の星から見えるが、星同士触れ合うことはない<sup>6</sup>とされていた<sup>6</sup>。しかし、いずれ明らかになることであるが、ヘレナとバートラムの間にある障害は、実は、階級の違いそのものにあるのではなく、バートラム自身の偏見の中にあるのである。彼の母のように偏見を持っていなかったら、何の問題も起こらなかったであろう。

しかしながら、この場面の終わりまでには、彼女はもはや運命を甘受しようとはせずに、幸福を邪魔している障害を克服するために、全力を尽くそうとするようになるのである。

天から来ると私達が思っている救いが  
私達自身の中にあることがある。運命が支配する空も  
自由にできる余地を私たちに与えている。企てたことが  
後退するのは、私達が怠けているからだわ。  
Our remedies oft in ourselves do lie,  
Which we ascribe to heaven. The fated sky  
Gives us free scope, only doth backward pull  
Our slow designs when we ourselves are dull.

1.1.215-8.

彼女は自分の運命 (fortune) に対して勝利を収めるため、自分の意志の力 (nature) を信じようとしている。

身分が何れ程かけ離れていようと、人の意志は、

二人を同じ身分の者同士のように会わせ、親しい者同士のように接吻させる。

The mightiest space in fortune nature brings  
To join like likes, and kiss like native things.

1.1.221-2.

王を治すために出発する時、彼女はこのような楽観的な気分になっている<sup>7</sup>。ここに運命に対抗する、ルネッサンスの人間中心主義を見ることができる。それ故、19世紀には、彼女は人気があり、バーナード・ショウ (Bernard Shaw) も、彼女を最初の「近代的な女性 (modern woman)」と見なし、彼女の中に『人形の家』のノラを見る<sup>8</sup>。しかし彼女を単に自分の欲望を満足させようとしている女性として、割り切ることはできない。「あの方の召使として生き、召使として死にたいと思います。I/ His servant live, and will his vassal die: (1.3.155-6.)」と伯爵夫人に語っているように、彼女の目的は、伯爵夫人になって社会的地位を得るという欲望を満足させることではなく、彼に仕えることである。従って、彼女は決して傲慢にならず、いつも控え目である。ハムレットと同様に、それは、人間のする予測など当てにできないということを悟り、自分自身を神の道具、或いは、使いと考えることから生まれてくる態度であろう。それが彼女の魅力である。彼女が王に病気を治させて欲しいと申し出る時の台詞にも、それが良く表われている。

最も約束されていると思われる時

しばしば予測は外れます。そして、希望が冷え切って、  
絶望が大きい時に、しばしば予測が当たるのです。(中略)

神に吹き込まれた靈感も人間の息に吹き消され、  
人間は外見によって押し量ることしかできない、  
全知の神はそうはなさない。

私たちが天の助けを人間の業と思い込む時、  
最も思い上がっているに違いありません。

陛下、私に努力をさせてください。

私ではなく天をお試し下さい。

Oft expectation fails, and most oft there  
Where most it promises, and oft it hits  
Where hope is coldest and despair most fits...  
Inspired merit so by breath is barred.  
It is not so with Him that all things knows  
As 'tis with us that square our guess by shows;  
But most it is presumption in us when  
The help of heaven we count the act of men.  
Dear sir, to my endeavours give consent.  
Of heaven, not me, make an experiment.

2.1.142-4, 148-54.

148行目は、靈感を受けた預言者達が語る真実を、ヘブライの王達が、否定した事実に言及している<sup>9</sup>。ここには全てを見通す神と、外見に右往左往する人間が、対照的に描かれ、神への絶対的な信頼が見られる。ここで注目すべきは、彼女が試すように王に求めているのは、彼女自身をではなく、天であるという事である。そしてまた、王の重病を癒した時も、ヘレナは謙虚である。自分の力を誇示したりせず、「天は私を使って、王を癒された Heaven hath through me restored the King to health. (2.3.67.)」と繰り返

して、癒したのは彼女ではなく、神であることを強調する。ラヒューも、王の治癒は、超自然的で、原因を持っていない (causeless) と語っている。そこで、王はその褒美として、彼女に夫を廷臣の中から選ぶように言う。その時も、彼女は謙虚である。バートラムのところへ行き、

あなたを選ぶなどとは申せません。ただ私の全てと  
生きている限り仕えようという私の心を  
導いて下さるあなたの力に委ねます。  
I dare not say I take you, but I give  
Me and my service, ever while I live,  
Into your guiding power...

2.3.105-7.

彼女は「取る (taking)」のではなく、「与える (giving)」ことを、謙虚に望んでいるのである。ただ単に、自己実現のためだけに、運命を切り開こうとしている女性の言葉とは思えない。しかし、それを理解しようとしないうバートラムは、王に向かって怒る。

私の父が彼女を育てたのです。  
貧乏医者 of 娘を私の妻に！この女を軽蔑したまま  
永久に破滅した方がまし。  
She had her breeding at my father's charge:  
A poor physician's daughter my wife! D disdain  
Rather corrupt me ever!

2.3.117-9.

彼の母親と違い、彼は低い階級の人間を軽蔑している。王が、階級よりも本人の美德の方が大切だと諭しても、愛せないし、愛する気も無いと言って、王を侮辱するだけである。彼の頑固な態度は変わらない。しかし、それも当然のことかも知れない。ヘレナがバートラムではなく王の病を治したことの代償として、直接関係のないバートラムが結婚させられるのだから、不満を持つのも無理からぬところではあろう。

とにかく王は王権を使って、無理やり二人を結婚させてしまう。その間ヘレナはバートラムの侮辱をじっと耐えるのである<sup>10</sup>。その時点では、彼女は成功したようにみえるけれども、結局、それは一種の失敗であることが解る。というのは、すでに述べたように、こうして望む夫を彼女は得るのではあるが、彼が彼女を見捨てるので、結婚は旨く行きそうにないからである<sup>11</sup>。事実、バートラムは、ヘレナが彼の指輪を奪い、彼の子供を宿すことができたなら、自分を夫と呼んでいいという残酷な手紙を送り付けて、自分は戦場に行ってしまう。彼の母親である伯爵夫人も、自分の息子のそのような常軌を逸した行動に呆れかえり、ヘレナに同情し、「あれの名前を私の血から洗い落としましょう。I do wash his name out of my blood. (3.2.66.)」といった激しい口調で、勘当することを誓う程である。しかし、そのような仕打ちに会っても、ヘレナの彼に対する想いは変わらない。それどころか、彼の身の上を案じ、戦争で身を危険にさらすようにさせたことに対して、罪の意識さえ感じているのである。

可愛そうな方、  
あなたをあなたの国から追い出して、  
非情な戦争の危険にあなたの優雅な体を曝させたのは

この私なのね。美しい瞳に射られていたあなたを  
宮廷から追い立て、煙る銃の的にさせたのは  
私なのね。

Poor lord! is't I  
That chase thee from thy country and expose  
Those tender limbs of thine to the event  
Of the none-sparing war? And is it I  
That drive thee from the sportive court, where thou  
Wast shot at with fair eyes, to be the mark  
Of smoky muskets?

3.2.101-7.

心地よい宮廷生活を捨てさせ、危険な戦場に身を曝すようにさせたことで、彼女は自責の念に苦しむ。「身の程知らずの恋が私に重い罪を犯すようにさせた Ambitious love hath so in me offended (3.4.5.)」とし、

あの方は死や私には善良過ぎ、立派過ぎますので、  
あの方を自由にするため、死は私が引き受けます。  
He is too good and fair for death and me,  
Whom I myself embrace to set him free.'

3.4.16-7.

という言葉で結んだ手紙を伯爵夫人に残して、ヘレナは巡礼の旅に出る。この手紙から判断すると、彼女が聖女のふりをして、それを演じているとは考えられない。自分の利益のためではなく、彼に宗教的な救いを与えようとしている。次の台詞からも理解できるように、伯爵夫人も、ヘレナによるバートラムの罪の贖い、罪からの救い (redemption) を暗示している。彼がどのように墮落し、罪に落ちていこうと、ヘレナによって救われる可能性は残されているのである<sup>12</sup>。

なんとという天使が  
この愚劣な夫を祝福しているのだろう。あの娘の祈りに  
天も喜んで耳を傾け、叶えてやろうと思っておられる。  
彼女の祈りが、神の最高の正義の怒りからあの子を救えなければ  
あの子は栄えることはできないであろう。

What angel shall  
Bless this unworthy husband? He cannot thrive  
Unless her prayers, whom heaven delights to hear  
And loves to grant, reprieve him from the wrath  
Of greatest justice.

3.4.25-9.

ここでヘレナは聖母マリアと重ね合わされていて、歴史的に見ても、救しが主題となっている喜劇の女主人公は、中世奇跡劇の聖母マリアの流れをくんでおり、この劇に於いても、ヘレナは迷っているバートラムを聖母マリアのように、救うように求められている<sup>13</sup>。

### bed-trickが意味するもの

彼女は bed-trick を使って、バートラムが彼女に、結婚を成就するために課した二つの条件を一挙に満たしてしまう。ダイアナの母である未亡人に次のように語る。

計画を実行して見ましょう。成功すれば  
あの人は邪な意図をもっていても正しい行いをするようになるし、  
私は正しい意図をもって正しい行為をすることになり、  
どちらも罪にはならないが、やはり罪深いこと。  
Let us assay our plot, which if it speed  
Is wicked meaning in a lawful deed  
And lawful meaning in a lawful act,  
Where both not sin, and yet a sinful fact.

3.7.44-7.

バートラムから見れば、実際には、ダイアナではなく、自分の妻ヘレナと寝た訳で、罪は犯してはいない。つまり「邪な意図をもっていても正しい行いをする」ことになり、ヘレナにしてみても、バートラムを騙すことに他ならないが、夫を騙す、つまり、拒否するのではなく、受け入れることによって、罪深い欲情の対象であるダイアナを、自分自身、即ち、正当な欲望の対象である妻ヘレナと置き換え、夫が結婚の誓いを破って、自分の名誉を汚すことから彼を救い、結婚が成就するように彼を導くことになる<sup>14</sup>。bed-trickは、結果が良ければ、そこに至る過程はどのようであっても良いという、この劇の題名の意味を、端的に示している点で、劇中もっとも重要な出来事であると言える。

bed-trick の例は、創世記38章に見られる。ユダの3人の子の内長男エルは、タマルと結婚するが、子供ができないうちに死んだので、タマルは亡くなった夫の弟オナンと結婚する。しかし、彼も子供を作ろうとしないまま死ぬ。そこで、その弟シラが成人するまで待つように言われるが、未亡人タマルはイスラエルの世継ぎが欲しかったので、売春婦に変装して、ユダと寝て身ごもる。代金の代わりに印と紐と杖を貰う。タマルが息子の嫁であることに、ユダが気付かなかったのは、神の摂理だとされている。彼女は双子を出産する。その一人がパレスで、ダビデ王、従って、キリストの直接の子孫である。そのような理由で、エリザベス朝に於いては、bed-trickは、人事に働いている神の摂理の、よく知られた象徴であった。不道德と言うより、必要なものと考えられていた。従って、王の治癒と共にbed-trickは、この劇のプロットに欠かすことのできないものである<sup>15</sup>。

しかし、ヘレナが完全に聖女であって、bed-trickを神の摂理として、何の疑念も持たずに受け容れておれば、「やはり罪深いこと (a sinful fact)」と感ずることは無い筈である。従って、聖女のようなヘレナが、時として生身の女性に変わることがあると、解釈せざるをえない。もう一か所、生身のヘレナを感じさせる台詞がある。彼女はダイアナの代わりにバートラムと寝た後、ベッドの中では女性は全て同じであるかのように、嫌っていた女性とでも、男は欲情を満たすことができるものだということを知る。

男とは不思議なもの、  
憎んでいる女をあのように楽しめるとは  
情欲がすすんで惑わされようとして  
真っ暗な夜を更に暗く汚す時には。そのように、情欲は  
遠くにいる女だと思い込み、嫌っている女と戯れる。

But O, strange men,  
That can such sweet use make of what they hate,

When saucy trusting of the cozened thoughts  
 Defiles the pitchy night; so lust doth play  
 With what it loathes, for that which is away. 4.4.21-5.

しかし、彼女はその事実を知っても、落胆したり、怒ったり、心の平静さを失ったり、反発することはしないで、むしろその事実を受け入れ、乗り越えようとする。どのようなことがあろうとも、「終り良ければ全てよし」という諺、「終り」、即ち、神の摂理による結果が手段を正当化すると信じる<sup>16</sup>。

条件を満たすことによって時が経って、夏が来るでしょう、  
 野バラは棘だけでなく、花びらも出して、  
 刺すだけでなく、甘く薫るでしょう。(中略)  
 「終り良ければ全てよし」、いつも終りが王冠。  
 途中がどうであれ、終りが名誉。  
 But with that word the time will bring on summer,  
 When briars shall have leaves as well as thorns  
 And be as sweet as sharp...  
 'All's well that ends well;' still the fine's the crown;  
 What'e'er the course, the end is the renown. 4.4.31-33, 35-6.

「野バラが棘で刺す」ということは、具体的には、彼女がバートラムに嫌われ、ダイアナへの彼の欲情によって侮辱されていることを、そして「夏」は「終り」を示す。夏を楽しむためには、そうした冬の寒さに耐えなければならぬのだが、その辛さは、「王冠」であり「名誉」である「終り」つまり、神による仕上げを思うことによって軽減される<sup>17</sup>。bed-trickで、バートラムの情欲を甘受することによって、ヘレナは冬のような屈辱に耐え、二人を救うことになる。ヘレナもハムレットのように、人間が荒削りはしても、神が最後の仕上げをすると信じているから、難しい狭い道を選んだのだ。それとは対照的に、バートラムとパローレスは、易しい広い道を選び、他人を騙すことで自分を救おうとして、結局、自分自身を裏切ることになる。道化が語る。

俺は狭い門の家で満足だ  
 お偉い方々はくぐりにくいだろうけれど。  
 謙虚な人はくぐるかも知れんが、多くの者は  
 寒さに敏感で心地良い方が良いから、広い門と大きな火に  
 続く花咲く道を求めるもの。

I am for the house with the  
 narrow gate, which I take to be too little for pomp to  
 enter. Some that humble themselves may, but the many  
 will be too chill and tender, and they'll be for the  
 flow'ry way that leads to the broad gate and the great  
 fire. 4.5.49-54.

G.W.ナイトは、ヘレナは、宗教と宮廷を、謙虚さと名誉をつないでおり、購う力を持ち、キリストのように機能し、彼女の愛は宗教的なもので、偶像崇拜ではなく、謙虚さから来るものだとだと断言している<sup>18</sup>。その謙虚さを持って、王の病を治し、夫をそのように救うことによって、死へと向かっていた社会



の健康と多産性を、彼女は取り戻すことになる<sup>19</sup>。カーンもbed-trickの目的は、復讐ではなく、魂の救いであるとしている<sup>20</sup>。ティリアードも語っているように、ヘレナとバートラムはリアリスティックに描かれると同時に、それぞれ神の恩寵を受けた者、救われた人間として描かれている<sup>21</sup>。

客観的に判断して、バートラムは彼女の偶像とはなりえず、彼女の献身的な愛情に値しない男性であるのに、軽蔑されながらも、何故このように追い求めるのか、無慈悲な頑固さを持ってこの世の幸運を求めているからなのか。それとも、彼女が彼の中に何か深いものを直感していたのか、或いは、宗教的な意味で、聖女のように宗教的な忍耐力を持って、バートラムを購い、救おうとしているからなのか。容易に理解しがたい点であろう。これまで考察してきたことから、恐らく、聖女と捉えるのが、彼女の実像に最も近いのではなかろうか。しかし神聖な愛と世俗的な恋の混合体と捉えるのが妥当であろう。

### バートラムの罪

人間とは、損をしながら非常に喜ぶし、得をしながら非常に悲しむ、愚かなものである(4.3.62-5.)。正にバートラムに当てはまる。家宝の指輪を与えてまで、処女を誘惑し、「狩人のように、猟犬のような自分の欲情に、ダイアナの操という獲物の肉の一部分を、褒美として与えて、欲情をかきたてて he fleshes his will in the spoil of her honour (4.3.15.)」操を汚そうとする。バートラムは、実はヘレナを巻き込んでいるのだが、暗闇の中で一瞬の欲情を満たそうとする不倫関係と引き替えに、ヘレナへの結婚の誓約、ダイアナへの一連の誓い、ヘレナとの結婚を拒否した理由であった筈の家族の名誉、全てのことを裏切る<sup>22</sup>。ヘレナは、彼女の父から伝えられた力をもって王の病を癒す。それとは対照的にバートラムは、情欲を満足させるために、家宝の指輪をも手放してしまう<sup>23</sup>。そのような人間の根源的な愚劣さについて、貴族2が述べているように、結局「神による助けがなければ、我々はどのようなものになるか分からない as we are ourselves, what things are we! (4.3.18-9.)」のである<sup>24</sup>。自分が何をしているのか判断できないのが、人間であろう。

### 俗物パローレス

ヘレナと対照的に描かれているのがパローレスである。彼の名前はフランス語の paroles から来ており、英語なら「言葉氏 (Mr. Words)」となる。言葉ばかり喋って実行せず、言葉で自らの腐敗した本性を隠している人間で、1幕1場で彼が登場する時、ヘレナが描写しているように(1.1.102-3.)、嘘つきで、馬鹿で、臆病者である。「裸の賢者が着膨れした患者に仕える Cold wisdom waiting on superfluous folly. (1.1.107.)」のはよくあることだとヘレナが語っているように、物質的な富を追い求める「着膨れした患者」であるパローレスは、出世しようとあくせくしており、若い伯爵バートラムにくっついて、彼が聞きたいと思っていることだけを語り、いつもお世辞を言って彼に取り入ることにより、宮廷で頭角を表わそうとしている<sup>25</sup>。彼にとって、宮廷とは、服装や作法の流行の先端にいることの出来る場所なのだ。だから到着したばかりのバートラムに、宮廷ではもっと派手に振る舞うように忠告をする<sup>26</sup>。

あの貴族の廷臣達にもっと

長く丁寧な挨拶をしなさい。あれでは、別れの挨拶として  
冷た過ぎる。もっと表情豊かにやりなさい。

なにしろ、流行の先端を行く服装をし、  
 宮廷風の身のこなし方、食べ方、喋り方、  
 最新の流行を身に付けている人達ですから。  
 たとえ悪魔が音頭を取っているとしても、ついて行きなさい。  
 さあ、追い掛けて行って、もっと長々と別れの挨拶を。

Use a more spacious  
 ceremony to the noble lords, you have restrained yourself  
 within the list of too cold an adieu: be more expressive  
 to them; for they wear themselves in the cap of the time,  
 there do muster true gait, eat, speak, and move under  
 the influence of the most received star, and though the  
 devil lead the measure, such are to be followed; after  
 them, and take a more dilated farewell. 2.1.50-7.

パローレスは、最新の流行、つまり、実質より外見に心を奪われてしまっている。こうした流行の先端を  
 いく服装は、物質的な富を象徴している。王がバートラムの父の生前の言葉を引用して次のように語る。

(若者の) 気紛れな感覚は  
 新しいもの以外は何でも軽蔑し、その判断力は  
 服装だけを作り出し、その心は  
 流行よりも早く変わる。  
 whose apprehensive senses  
 All but new things disdain, whose judgments are  
 Mere fathers of their garments, whose constancies  
 Expire before their fashions. 1.2.60-3.

このように流行の服装を考案すること以外には、自分の能力を使わない若い世代を<sup>27</sup>、バートラムの父も  
 軽蔑していたし、フランス王も軽蔑している。パローレスはそのように軽蔑されるべき人間であって、ラ  
 ヒューがバートラムに警告しているように、「こいつの魂は服 the soul of this man is his clothes (2.5.43.)」  
 であり、核となる魂を持たず、服と言葉、つまり、外見の世界だけに生きている。バートラムは彼のこの  
 ような価値観の影響を強く受けるのである。

パローレスが、如何に嘘つきであるかを明らかにバートラムに示して見せるために、若い貴族達は一計  
 を案じて、彼に敵に奪われた太鼓を取り返すと、公言させるように仕向ける。これは、ヘレナがバートラ  
 ムに彼自身がどのような者であるかを知らしめるのと、平行して行われる<sup>28</sup>。パローレスはそれにまんま  
 と乗ってくる。皮肉なことに、「私は多く語ることを好まない。I love not many words. (3.6.81.)」という  
 台詞が、彼の口から飛び出す。これがまた嘲笑的となる。彼は仲間に襲われて、目隠しをされて、連行  
 される。初めは百戦練磨の兵士であるふりをして、見掛けを取り繕う。しかし、目隠しをされ、縛られ  
 て、自分は敵の捕虜になったのだという恐怖に襲われると、臆病者より始末におえなくなる。彼にこの悪  
 戯をした若い貴族達は、期待していた以上のことを発見することになる。パローレスは全ての軍事機密を  
 進んで漏らすばかりでなく、同僚の私生活についての恥ずべき話までしてみせるのである。自分が友情を  
 深めようとしている戦友バートラムのことも悪しざまに、「馬鹿なくだらな青二才で、大変に好色な  
 男 a foolish idle boy, but for all that very ruttish (4.3.212)」とか、「処女にとって鯨のようなもの、手当

たりしだい稚魚をむさぼる a whale to virginity, and devours up all the fry it finds (4.3.217-8.)」などと悪口を言う<sup>29</sup>。その上、驚いたことには、ダイアナ宛の手紙には、バートラムの悪口を書いている。パローレスは自分の主義だけでなく、このようにして自分の友人をも裏切る。バートラムがダイアナへの欲情のために、全てを裏切ったように、パローレスも命欲しさのために、全てを裏切る。バートラムが暗闇の中で、自分の妻と不倫したように、目隠しされたパローレスも、暗闇の中で自分の仲間を、自分の仲間に向かって裏切るのである<sup>30</sup>。名誉ある人間である振りはしてはいるが、実際それを支える実質的なものは何も無い。

パローレスの実体を洞察できるかどうかは、登場人物の成熟度の目安となる。伯爵夫人も、ラヒューも、ヘレナも、パローレスの本性を見抜いているので騙されることがないが、バートラムだけは人を見抜く力が無い。賢明で信頼できるラヒューを無視し、信用できないパローレスを高く評価している。何も分かっていない。しかし、パローレスの裏切りに気付くようになる時、彼は成長し始めるのである。バートラムは不名誉な行ないはするが、パローレスのようなならずものではない。

しかし、このようにパローレスが若い貴族達の罠に掛かって、名誉の仮面が剥取られる時、バートラムが後に王の前でするように、彼も目隠しを取り外されて、自分の本当の姿を見せつけられる時、自分の過ちとまともに向かいあう覚悟を決める。それは見事である。ヘレナやバートラムの生きようとする力と同様、彼の生き延びようとする意志も、こうした屈辱的な出来事によっても衰えることがない。逆境を生き延びる術を知っている。

俺の心臓が肥大していたら

これで破裂するところだが... もう隊長はやめた。  
 だが、隊長並みに、食べたり、飲んだり、寝たりは  
 してやる。このままの自分でおりゃ  
 これからも生きて行けるさ。自分が法螺吹きだと分かっている奴は、  
 恐れるがいい、どんなに法螺吹きでも  
 馬鹿だってえっことがいづれ判かちまうんだからな。  
 剣よ、錆付いてしまえ。頬よ、冷めよ。パローレスよ、  
 恥の中で安全に生きよ。馬鹿にされたら、馬鹿であることによって栄えよ。  
 生きておれば、どんな人間にも生活できる場所と手立てがあるのだからな。

If my heart were great,

Twould burst at this...Captain I'll be no more,  
 But I will eat and drink, and sleep as soft  
 As captain shall: simply the thing I am  
 Shall make me live. Who knows himself a braggart,  
 Let him fear this; for it will come to pass  
 That every braggart shall be found an ass  
 Rust, sword! cool, blushes! and, Parolles, live  
 Safest in shame! being fooled, by foolery thrive!  
 There's place and means for every man alive.

4.3.327-36.

徹底的に侮辱されたので、彼はこれからも演技する必要はない。それで、ほっとしている。自分自身に立ち返り、金貨でなく、銅貨として通用していけると彼は考える<sup>31</sup>。だが、少なくとも、パローレスは、自分がならず者であるという事実を直視し、そうした自分を受け入れようとしている<sup>32</sup>。パローレスにつ

いても、自分と向き合い、自分を受け入れる最終段階に『終わり良ければ全て良し』と言っているのである。こうした、ある登場人物が、仮面を脱いで、武勇があるというようなふりをするのを止め、気取りを捨て、開き直り、居直る、裸になる、つまり、ありのままの自分自身を受け入れるといった180度の転換をするところが、シェイクスピア劇の面白さである。ありのままでおれば、生きていけるということは、他の登場人物、特にバートラムにも、当てはまることである。哲学的な登場人物である貴族2が言うように、

人生の布地は、善と悪で繕い合わされた糸でできている。  
 過失が美德を鞭打つことがなければ、  
 美德は傲慢になり、罪が美德に慰められることがなければ、  
 我々は罪の意識の中で絶望してしまうだろう。  
 The web of our life is of a mingled yarn, good  
 and ill together: our virtues would be proud, if our  
 faults whipped them not, and our crimes would  
 despair, if they were not cherished by our virtues. 4.3.68-71.

他のシェイクスピア劇に於いても、しばしば指摘される人間の愚かさが、この劇でも指摘されている。それは、人間は失ってみないと、真価が分からない、失って初めて、真価が分かるということである。大抵の場合、真実を理解するのが遅すぎるので、取り返しのつかないことになることが多過ぎる。ヘレナが亡くなったと聞いて、彼女の真価を知ることができるようになり、彼女を愛するようになったと、バートラムが言うのを聞いて、王が彼に語る。

人間はとかく  
 せっかちで、大切なものを持っていながら、それを軽視し、  
 それが墓に入ってから初めてその真価に気づくのだ。  
 しばしば不当な憎しみのために  
 友を亡きものにしながら、その死骸に涙を流すのだ。  
 Our rash faults  
 Make trivial price of serious things we have,  
 Not knowing them, until we know their grave,  
 Oft our displeasure, to ourselves unjust,  
 Destroy our friends and after weep their dust: 5.3.60-4.

ヘレナが自分は死んだという嘘を知らせることによって、バートラムは彼女の真価を知ることになった訳で、結果が良ければ、過程はどのようであっても良い、これも「終わり良ければ全て良し」である。王が最後に次の諺のような台詞を語って、この劇は幕となる。

終りがこのようにめでたく収まれば全て良いように見える。  
 辛い過去は過ぎ去ったので、それだけ甘い未来を喜び迎えられる。  
 All yet seems well, and if it end so meet,  
 The bitter past, more welcome is the sweet. 5.3.331-2.

その終わり方が実際は暗いので、良い状態で終わったとは到底言い難い。その語に良さ「そうに見える

(seems)」だけという皮肉な意味が隠されているのか<sup>33</sup>、或いは、全てが良いとは限らないということを示しているのかも知れない<sup>34</sup>。

### 赦しと次世代への希望

シェイクスピアが生涯掛けて追及した主題の一つが、復讐であった。喜劇、悲劇を問わず、全作品を通して、その主題が採り上げられている。人生の総決算ともいえるロマンス劇に於いては、復讐から赦しへと主題が推移していく。シェイクスピアは、彼自身の人生経験から、人間が不完全な存在であることを認識すればする程、赦し合うことの重要性を、特に晩年になって、強く意識するようになったに違いない。不完全な人間が復讐し合っておれば、血が血を呼ぶ連鎖反応を引き起こすだけで、救いはない。赦し合うことによって、初めて人間は救われる。その赦しの主題の萌芽がこの劇の終幕にも認められる。王は伯爵夫人に、王命に背き、ヘレナに酷い仕打ちをした、その息子バートラムについて、次のように語る。

私は全てを赦し、忘れてしまっている、  
私の復讐心は弓のように引き絞られ、  
矢を放つ時をうかがったものだが。  
I have forgiven and forgotten all,  
Though my revenges were high bent upon him  
And watched the time to shoot. 5.3.9-11.

王は今までバートラムに復讐する機会を狙っていたが、今は全てを赦している。罪人としてではなく、「初めて会った人のように」彼を受け入れようとしている。復讐とか赦しさえ問題にならない境地に達している。擬人化して表現されているのだが、バートラムのおかした罪は死に、決して思い出されることのないような深みに、王はそれを葬ろうとする。本当の意味で生きるために。

彼をここに呼んでくれ。  
和解したのだ。一目見るだけで過去は  
死ぬことになる。赦しを乞わせることはない。  
彼の大きな罪は死に、  
忘却より深い所に私は葬る  
私を怒らせるであろうその罪の残骸を。  
Well, call him hither.  
We are reconciled, and the first view shall kill  
All repetition. Let him not ask our pardon.  
The nature of his great offence is dead,  
And deeper than oblivion we do bury  
Th' incensing relics of it. 5.3.20-25.

次にダイアナの台詞が、この劇の全てを要約する。

伯爵は私のベッドを汚されたことをご存じです、  
その時、奥様を懐妊させられたのです。

奥様は亡くなられましたが、そのお子が蹴るのを感じておられます。  
死んだ人が生きているという私の謎、  
今、その意味をご覧ください。

He knows himself my bed he hath defiled,  
And at that time he got his wife with child.  
Dead though she be she feels her young one kick.  
So there's my riddle; one that's dead is quick.  
And now behold the meaning.

5.3.299-303.

彼女が王に語っている時に、ヘレナが未亡人に連れられて登場する。この喜劇は死で始まり、治癒を経過して、最後には、それまで死んだと思われていた女性ヘレナが、妊娠して現れる。彼女は新生の肉体的、精神的象徴であると言えよう<sup>35</sup>。基本的にこれは、復活、新生を象徴する希望の劇である。

S.O.

<sup>1</sup> Barry Took, "All's Well That Ends Well", *Shakespeare in Perspective, Vol. I*, ed. Roger Sales, (British Broadcasting Corporation, 1984), p. 224.

<sup>2</sup> John Wilders, *New Prefaces to Shakespeare* (Basil Blackwell, 1988), p. 183.

<sup>3</sup> Victor L. Cahn, *Shakespeare the Playwright*, (Praeger, 1996), p. 703.

<sup>4</sup> Maurice Charney, *All of Shakespeare* (Columbia University Press, 1993), p. 99.

<sup>5</sup> John Wilders, *op. cit.*, pp. 183-4.

<sup>6</sup> D. Wilson, *All's Well That Ends Well; The New Shakespeare* (Cambridge University Press, 1968), p. 121.

<sup>7</sup> John Wilders, *op. cit.*, p. 185.

<sup>8</sup> Barry Took, *op. cit.*, p. 223.

<sup>9</sup> E. M. W. Tillyard, "Shakespeare's Problem Plays", *Shakespeare's Christian Dimension*, ed. Roy Battenhouse, (Indiana University Press, 1994), p. 151.

<sup>10</sup> Victor L. Cahn, *op. cit.*, pp. 708-9.

<sup>11</sup> John Wilders, *op. cit.*, p. 185.

<sup>12</sup> Victor L. Cahn, *op. cit.*, p. 712.

<sup>13</sup> Robert Grams Hunter, "Shakespeare and the Comedy of Forgiveness", *Shakespeare's Christian Dimension*, ed. Roy Battenhouse, (Indiana University Press, 1994), p. 154.

<sup>14</sup> Eric LaGuardia "Nature Redeemed", *Shakespeare's Christian Dimension*, ed. Roy Battenhouse, (Indiana University Press, 1994), p. 149.

<sup>15</sup> Peggy Munoz Simonds, "Sacred and Sexual Motifs in *All's Well*", *Shakespeare's Christian Dimension*, ed. Roy Battenhouse, (Indiana University Press, 1994), p. 162

<sup>16</sup> Victor L. Cahn, *op. cit.*, p. 713.

<sup>17</sup> Frances Pearce, "In Quest of Unity", *Shakespeare's Christian Dimension*, ed. Roy Battenhouse, (Indiana University Press, 1994), p. 155.

<sup>18</sup> G. W. Knight, "The Third Eye", *Shakespearean Criticism Vol. 7*, ed. L. L. Harris (Gale Research Company, 1988), p. 73.

<sup>19</sup> Robert Grams Hunter, *op. cit.*, p. 153.

<sup>20</sup> Victor L. Cahn, *op. cit.*, pp. 712-3.

<sup>21</sup> E. M. W. Tillyard, *op. cit.*, p. 146.

<sup>22</sup> Barry Took, *op. cit.*, p. 226.

<sup>23</sup> John Wilders, *op. cit.*, p. 189.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 189.

<sup>25</sup> Maurice Charney, *All of Shakespeare* (Columbia University Press, 1993), p. 101.

<sup>26</sup> John Wilders, *op. cit.*, p. 189.

<sup>27</sup> D. Wilson, *op. cit.*, p. 127.

<sup>28</sup> Robert Grams Hunter, *op. cit.*, p. 153.

<sup>29</sup> Barry Took, *op. cit.*, p. 226.

<sup>30</sup> Robert Grams Hunter, *op. cit.*, p. 153.

<sup>31</sup> Vivian Thomas, *Moral Universe of Shakespeare's Problem Plays* (Routledge, 1991), p. 155.

<sup>32</sup> John Wilders, *op. cit.*, p. 189.

<sup>33</sup> Maurice Charney, *op. cit.*, p. 100.

<sup>34</sup> Victor L. Cahn, *op. cit.*, p. 719.

<sup>35</sup> Peggy Munoz Simonds, *op. cit.*, p. 162.